

# 開港・明治期の横浜資料

①開港期の横浜内外資料  
②明治期横浜の貿易とその資料

## ① 開港期の横浜内外資料

石井孝〈津田塾大学教授・横浜市史常任編集委員〉

### 一 ――はじめに

横浜には守護も地頭も大名も居なかったことから、はじめから市民の町だと思っている人もあるらしいが、これは、はなはだしい認識不足である。横浜は、開港という資本主義列強の要求に応じて、幕府という政治権力によって創造された都市である。それにさいして、本来の横浜の住民である農漁民は本村の一角に追放され、そのあとへは一獲千金をめざして他所者が入ってきた。また建設された港町横浜のうち東半分が、わが行政権力の入りえない外国人居住地域

(居留地)とされたことも、横浜ならではの特色である。

横浜は幕府の直轄地で、神奈川奉行が最高の行政官であった。奉行は、眺望のよい野毛山の上に庁舎を設け、ほかに新たに建設された横浜の中央に運上所をおき、そこで外交・貿易の事務をつかさどった。横浜の町政に当る機関として町会所が設けられ、ここに総年寄や各丁目の名主が出勤して事務をとった。総年寄や名主は奉行に任命された町役人であり、かつ町会所には奉行の下役も出勤していたので、町会所は町民の自治機関ではなく、神奈川奉行による行政

- 一 ――はじめに
- 二 ――公文書
- 三 ――商人の資料
- 四 ――外国資料および新聞紙

の末端である。そして維新後、この官治行政機構が神奈川県(神奈川県裁判所・神奈川県といっただこともある)のもとに入った。しかし政府の行政権も居留地には及ばないのだから、横浜は、租界(日本の居留地と同じ)をもつ中国の開港場と同じように、半植民地的色彩をもっていたといえよう。

以上の官僚行政のもとで、横浜を経済的に支配したのは、他地方から横浜に移住し投機に成功した商人、とくに横浜第一の輸出品生糸を外国商館に売った生糸の売込商であり、原(亀屋)・茂木(野沢屋)がその最大のものであった。

石井寛治氏の『日本蚕糸業史分析』によると、一九世紀末、原・茂木の所得は、安田・古河・大倉のそれに匹敵していた。彼らがいずれも生糸産地の出身で、その集荷に恵まれた条件をもっていたことに注目しておきたい。

さて横浜は、文献上の資料に最も恵まれていない都市である。関東大震災で市の中心部が灰燼に帰したため、行政に關係する官公庁の文書や横浜の經濟界を支配した商店の文書も失われてしまった。私は、過去二十余年間『横浜市史』の編集に従事してきたが、中心となるべき資料が欠けているため、周辺の資料から探っていくなければならなかった。そうした手法をとっても、市の發展の中核に迫ることはなかなか困難で、でき上ったものをみると、やはり隔靴搔痒の感を免れないものがある。

つぎに、開港から明治初期までの、いわば創生期の横浜の歴史を知るには、どんな文献資料があるかをみよう。

## 二——公文書

横浜と同時に貿易が開始された長崎・箱館（函館）においては、それぞれの奉行の文書が現存しているのに、横浜ではすでに明治初年、神奈川奉行の文書は失われていたらしい。私はか

つて、史料編纂官中村勝麻呂氏（故人）から、神奈川奉行の文書は政權移動のさい旧幕府側によって処分されてしまったということを知った。こういうわけで横浜はすでに、震災を待たずに、公文書の存在という点では、他の開港場にくらべて恵まれない状態にあった。

そうすると、神奈川奉行の文書に代るべき幕末期の公文書はどうかというと、外国奉行の文書を中心に徳川幕府が編集した外交文書集の『通信全覽』（安政六年・万延元年）およびそれを引きついで外務省が編集した『続通信全覽』（主として文久元年以後の文書で、『通信全覽』に収められなかった時代の文書をも含む）には、多数の横浜關係の文書が収められている。これが幕末期における横浜關係の最もよくまとまった国内資料である。『通信全覽』および『続通信全覽』はそれぞれ、「類輯之部」と「編年之部」と二様の形態で編集されているが、『続通信全覽』の「編年之部」は、今日、原型では存在しない。『通信全覽』および『続通信全覽』は、いまだ完全な公刊をみておらず、戦時中、『通信全覽』と『続通信全覽』（いずれも「類輯之部」）の一部が『幕末外交史料集成』の名で刊行されたことはあったが、戦争が苛烈になるとともに中断されてしまった。『続通信全覽』のうち横浜關係のものは、『横浜市史』資料編三

と六に収められている。なお『通信全覽』および『続通信全覽』編集の基礎となった外国奉行の文書は、東京大学史料編纂所に所蔵されており、他の外国關係の公文書とともに『幕末外国關係文書』として編年で刊行されているが、今日まだ万延元年三月までしか出ていない。

横浜開港の翌年万延元年（一八六〇）から、生糸ほか四品は、それぞれの品目を扱う江戸問屋がいったん買いつけて横浜へ送るといふ、貿易の統制が実施された。江戸問屋を管轄したのは町奉行である。こうした關係から、国立国会図書館に所蔵される、『旧幕府引継書類』という町奉行の文書には、以上の五品關係、とくに生糸關係の資料が含まれている。それらは、『市史』資料編一に収められている。生糸が横浜の港を發展させた重要輸出品であるだけに、開港当時の横浜にとっての重要な資料の一つである。

横浜を管轄する神奈川奉行の下部機関として保土ヶ谷宿名主蒞部（輕部）清兵衛・横浜村名主石川徳右衛門・神奈川宿名主石井源左衛門が同奉行から総年寄に命ぜられた。これら町政に当たった諸家のうち、今日、開港当時の文書をもっているのは保土ヶ谷の輕部家だけであり、その一部が『市史』資料編一に収められている。石川家の文書は現存しておらず、石井家の文書

は神奈川県立文化資料館に寄贈されたが、そのうち横浜関係のものは存在していないとのことである。

維新後、神奈川県から行政権を引きついだるのは神奈川県である。神奈川県資料として、政府の命令で編集したものに『神奈川県史料』（明治一―一七）があり、神奈川県立図書館から出版されているが、完全な資料とはいえない。明治初期に神奈川県で編集した外交文書に、外務省所蔵の『外交事類全誌』（明治三）があり、その後明治三〇年（一八九七）までの外交文書を編集したものに『外務要録』がある。後者は、『市史』資料編十六・十七・十八に収められている。神奈川県公文書が存在していない状態のもとでは貴重存在たることを失わない。

外務省の文書は、『日本外交文書』として刊行されているが、これは全体の文書の一部にすぎない。外務省外交史料館に保管されている文書のなかから、相当、横浜関係の資料を発見することができると思う。そのほか明治初期の資料として、本町名主小野兵助の子孫長野県上伊那郡小野村の小野家で、明治二年（一八六九）の町会所文書と明治三年（一八七〇）の兵助の日記が発見された。それらの写本はそれぞれ、『横浜町会所文書綴』および『横浜本町名主小

野兵助日記』と題して、横浜市史編集室に所蔵されている。

### 三――商人の資料

福地源一郎は、横浜の商人には幕府の内命で店を出した「門閥の豪商」、一獲千金をねらって移住してきた「冒険投機商」の二つの型があるといっている。後年横浜の経済界を支配した原・茂木のごときは、「冒険投機商」の出である。原・茂木が短期間に大をなすにいたったことを裏づける資料は、今日存在していない。しかし私は、『市史』編集の資料を収集している間に、「冒険投機商」の生態を知るべき資料を手に入れることができた。

開港とともに横浜へ出店した「冒険投機商」の一人に、甲州屋（篠原）忠右衛門という人物がある。甲州屋のことについては、すでに故藤本実也氏が『開港と生糸貿易』のなかで紹介していたので、私はそれを手掛りに、石井光太郎氏とともに三たび甲府の東南に当る富士見村（現石和町）東油川の篠原家をおとずれ、同家の土蔵中で多数の横浜関係の文書が発見することができた。そのうちの主要なものは、忠右衛門が郷里に残しておいた長男正次郎にあてて刻々に横浜の商況を報じた書簡である。これを読むこ

とによって、「冒険投機商」が短期間に富を蓄積していった秘密をさぐる事が可能になった。すなわちそれは、産地の買付価格と横浜の売込価格の開きから、時としては五〇%から一〇〇%もの利益をあげることもできたという事実である。甲州屋は、原や茂木がその地歩を固めた明治初年に蚕種投機の失敗から没落していくのであるが、甲州屋によって検証できた事実は、同じ「冒険投機商」の原や茂木が短期間に大をなした秘密に迫るものである。しかしこれもなにぶん、他からの類推だから、まえにいったように隔靴搔痒を免れない。

篠原家文書のうち忠右衛門の書簡は、拙稿「初期横浜貿易商人の存在形態」（横浜市立大学紀要Series A-18 No.86）の附録に収めておいた。それ以外の篠原家文書は、『市史』資料編一に収められている。篠原家の文書は、今日一括して山梨県立図書館に寄贈されたとのことである。篠原家のほか、横浜へ出店した商人の旧宅に文書が残っている例がある。たとえば、藤屋とよばれた売込商の出身地群馬県大間々町の藤生家には、「洋商差引帳」（『市史』資料編一所収）と称する帳簿がある。これは、文久元年（一八六一）から元治元年（一八六四）の四年間にわたる生糸売込の数量・価額を日を追って記録したもので、このような長期間の売込記録はめず

らしい。売込商の出身地をさがせば、同じような資料がなお発見される可能性がある。

「冒険投機商」と対照される「門閥の商人」のうち最大のもは三井である。三井は幕府の内命で出店し、生糸・絹織物の売込に従事したが、四年余りで文久三年九月、攘夷派の脅迫にあって貿易から退き、以後は、その業務を貿易金融に集中した。三井家の文書は、三井文庫に保管されているが、そのうち貿易に関するものを『市史』資料編一に収めておいた。三井は、越後屋として糸問屋の一つであったので、糸問屋を通じての生糸貿易統制について、町奉行の文書を補足することができる。

#### 四——外国資料および新聞紙

横浜についての国内資料の不足を補ってくれるものに、外国資料がある。横浜は外国人居留地を擁する開港場であり、かつ横浜をめぐる大きな外交上の事件が発生したことから、横浜の歴史を知るために外国資料の占める地位は、きわめて大きい。

外国資料のうち、英米兩國のそれが最もまともまっている。英国の資料で議会文書 Parliamentary Papers (青書 Blue Book とよばれる)のうち、一般外交に関するものは、主として

Correspondence respecting Affairs in Japan

と題され、領事からの貿易報告は Commercial Reports といわれる。米国の資料のうち一般外交に関するものは Papers relating to the Foreign Relations of the United States とし、通商に関するものを Report upon the Commercial Relations of the United States with Foreign Countries という。しかし以上の印刷された文書集は、外交文書のうちの一部を収めたにすぎない。戦後、ロンドンの公文書館 Public Record Office に保管される英国外務省文書やワシントンの国立文書館 National Archives に保管される国務省文書などの原資料がマイクロ・フィルムの形で輸入されるにいたって、研究には大きな便宜が提供されるようになった。外国人の殺傷など横浜における外交上の難問題や居留地の形成・構造などを解明するには、どうしても外国資料に頼らなければならない。また国内に正確な統計がなかった当時、貿易の状態を知るには、とくに英国領事の報告が不可欠の資料である。Commercial Reports で知られなかったことも、原資料によって明らかになれるようになった。

以上の公文書というべき外国資料のほか、外国人の書簡や日記がある。最近、高谷道男氏から横浜市に寄贈されたヘボン Hepburn の書簡

集はその一例である。

横浜の外国人居留地では、文久元年(一八六一)に『ジャパン・ヘラルド』Japan Herald が発行されたのをはじめとして、『ジャパン・エクスプレス』Japan Express、『ジャパン・コマーシャル・ニュース』Japan Commercial News、『ジャパン・タイムズ』Japan Times などが発行された。このうち『コマーシャル・ニュース』は『日本貿易新聞』、『日本交易新聞』、『横浜新聞紙』などの名で、『タイムズ』は『日本新聞』の名で、また『ヘラルド』は『日本新聞外編』の名で、それぞれ邦訳されている。それらはいずれも、蕃書調所(開成所)勤務の洋学者が、幕府要路の参考に供するために翻訳したものである(いずれも『幕末新聞全集』に収められる)。明治になって『ヘラルド』が続刊されたほか、『ジャパン・ガゼット』Japan Gazette、『ジャパン・ウィークリー・メール』Japan Weekly Mail などが発行された。なお『ヘラルド』の編集者で『ガゼット』の発行者であったブラックに、横浜の記事が多い『ヤング・ジャパン』(邦訳平凡社の『東洋文庫』所収)という著書があることを付記しておく。

これら外字新聞は、外国公使・領事の報告と相まって、横浜における外人社会の動静や貿易の状態などを知るにはよい資料である。しかし

その原文は、外国公使の報告などに一部付収されているのみで、まとまって存在しているものはない。ただ『ジャパン・タイムズ』の相当の部分が国立国会図書館に存在しており、『メーブル』は、諸所に散在しているのをまとめると、その大部分がそろうと思う。

日本字の新聞としては、まずわが国最初の日刊紙『横浜毎日新聞』（のち『東京横浜毎日新聞』と改称）をあげなければならぬ。そのほか横浜関係の記事が多い新聞には、『東京日々新聞』『時事新報』がある。これらの新聞紙は公文書が存在していない状態のものでその欠を

補うことができる。ことに『横浜毎日新聞』は、地元の新聞紙として横浜関係の記事が最も多く、私もかつて『市史』第三卷下第三編第一章・第二章を起草するにさいして、同紙に依拠することがはなはだ大きかった。

## ② 明治期横浜の貿易とその資料

山口和雄（創価大学教授・横浜市史編集委員）

関港以降明治期を通じて、横浜が輝かしい発展をとげたのは、なんといっても、横浜がわが国の主要貿易港としてさかんに輸出入を行ったからである。こんど、横浜に「開港資料館」ができて、そこに蒐集され、展示され資料の中核をなすのは、貿易関係資料とみてよいであろう。そこで、ここでは、外国貿易からみた明治期の横浜について述べ、それについての資料を若干紹介することにした。

### 一 貿易額と輸出入品

横浜は、明治前期においては、わが国最大の貿易港で、同港の輸出入額は全輸出入額の六〇%ないし七〇%を占め、輸入額も五〇%ないし七〇%を占めていた。明治後期に入っても、同港の貿易額は増進をつづけたが、その比重は低下し、輸出入額は四五%内外を、輸入額では二五%内外を占めるにすぎなくなった。それでも、輸出ではいぜん第一位の地位を保っていたが、輸入

- 一 貿易額と輸出入品
- 二 外商
- 三 売込商
- 四 引取商
- 五 日本直輸出入商

では明治二十六年頃から第一位を神戸港に奪われるにいたっている。神戸港がこのような発達をとげたのは、明治後期に綿糸紡績業、綿織物業等が大阪を中心に発達し、そのため神戸港が綿輸入、綿糸布輸出の中心港となったからである。

横浜港の主要輸出品は、明治前期には、生糸を筆頭に茶・銅・海産物などであった。初年には、蚕卵紙も多く輸出されたが、これはまもなく減少した。後期には、茶に代って羽二重・絹